

No. 12 : 春節の旅行動向

2月後半、香港の街角は赤一色になり、「ハッピーニューイヤー！」の音が響いた。ちょうどちんが揺れ、「福」や「恭喜發財（ゴンヘイファッチョイ）」といった縁起の良い文字が街にあふれる。1月が終わったばかりなのに不思議な気分になるが、今年の2月17日は旧暦の元旦に当たる「春節」だった。

香港をはじめとする中華圏では、新暦よりも旧暦の元旦を重視すると聞いていたが、その通りだった。実際、昨年12月下旬から今年1月初旬にかけて香港の祝日は元日のみだが、春節は2月17日から3連休となる。前後に1日休暇を取れば、土日と合わせて9連休となった。

有名な寺院は参拝客でごった返した。日をずらして訪ねたものの、「黄大仙」は入り口まで延々と列が続き、到底入れそうになく、別の寺院「車公廟」を訪れた。



【新年のお参りで賑わう車公廟の様子＝2月21日、香港・沙田】

南宋時代の將軍の神「車公」、白煙が立ち上る巨大な線香、熱心に拝む人々とそれを見守るガスマスク姿の係員。静謐（せいひつ）な日本の初詣とは異なる風景だが、強い御利益をいだけそうな気がした。

祝日制度は異なるが、中国本土も同じ日程で春節を迎えた。本土の春節は、都市部で働子が地方の実家に帰省する形が一般的だが、今年のトレンドは子が親を呼ぶ「逆帰省」だそうだ。本土ではこれら移動者の総数が過去最多の延べ95億人と報道された。海外旅行先では、タイ、マレーシアなどの東南アジアや韓国が人気であったという。

予想はできたが、日本ではなかった。これまで本土の春節の海外旅行先といえば、長らく日本が1位で、「不動の」と形容されていた。昨年10月の国慶節の大型連休の際も日本がトップと言われ、小欄でも次は春節が控えている、と期待を書いた。ところがわずか半年で状況は一変してしまった。

中国人観光客の減少による影響は、大小さまざまと聞く。さまざまなリスクを想定した観光地づくりも重要だろう。減少の理由が理由だけに、現地で誘客に携わる身としては無力感も否めないが、それでも粘り強くPRを続けていきたい。

もちろん本土ばかりではない。日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2025年の訪日外客数が前年を下回ったのは足元の香港のみ。ただし、12月単月では過去最高の外客数を記録しており、香港旅行会社によれば、訪日意欲は依然高い。一層の誘客に向けて、取り組みを加速させていきたい。

県香港事務所長 鈴木高明